

The Handmade Papers of Japan『日本の手漉紙』

欧米人を魅了した手漉和紙

「非常に美しい色紙で、まるで木綿か絹製品としかおもわれぬ立派な出来である」

江戸時代中期、長崎出島のオランダ商館医師・ドイツ人ケンペルは、帰国後刊行した著書『廻国奇観』(1712)のなかで、こう日本の手漉和紙を讃えている。また彼は手漉和紙の原料および製法を詳細に記録し、ヨーロッパ世界に初めて日本の和紙を知らしめた。



ケンペル『日本誌』楮の図より
【291.09 K9211】今出川図書館 貴重室

これは、日本人の手になる寛政10(1798)年刊行の『紙漉重宝記』、天明4(1784)年の『紙漉大概』に遡ること70年以上も前のことだった。その後もスウェーデン人医師ツンベルグやドイツ人博物学者シーボルトら、来日外国人の多くが和紙の素晴らしさに魅了され、世界に紹介することになる。

開国から明治以降も、ドイツ人のオイレンブルク、イギリス人オールコックなど駐日公使らによって和紙製造の情報が集められ、1862年のロンドン万国博、1867年のパリ万国博での出品物となり、広くヨーロッパの耳目を集めることになった。昭和に至っても欧米人の和紙に対する深い関心はやむことなく、多くの紙研究家が来日した。とりわけ紙の虜ともいべきアメリカ人研究者ハンターは、世界各地の紙のなかでも「全製紙技術の奇蹟」と日本の和紙を褒め讃えている。

和紙の美に魅せられた欧米人たちは、多くの和紙研

究書を著した。そのなかで、ひときわ精彩を放ち和紙研究の金字塔と謳われているのが、今回紹介する Thomas Keith Tindale, *The Handmade Papers of Japan* (Charles E. Tuttle, 1952)である。

The Handmade Papers of Japan 『日本の手漉紙』

著者ティンダル(Thomas Keith Tindale 1909-1981)は、終戦直後に来日して連合軍司令部の人事顧問・大学行政担当の要職を務めた人物である。在職時たまたま訪れた内閣抄紙局で目にしたスカシ入りの和紙の美に魅せられ、全世界への紹介を思いつくことになった。退職後は8カ月のあいだ日本に留まり、各地の紙漉村に足を運んで資料を集め、妻のハリエツトとともに一冊の書物に纏め上げたというのが製作の由来である。

本の構成は、以下の4巻からなる。

VOL.1 The Handmade Papers of Japan

VOL.2 The Seki Collection

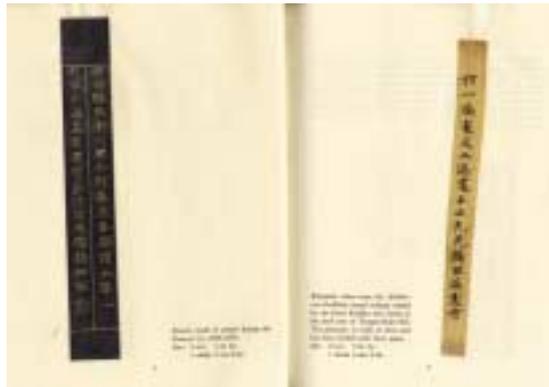
VOL.3 The Contemporary Collection

VOL.4 The Watermark Collection

VOL.1はティンダル自らが各地の紙郷を訪ねて調査した報告書で、手漉和紙の製紙法を在日外国人美術写真家の最高峰をゆく人、フランス・ハーンによる写真入りで紹介したものだ。VOL.2からVOL.4は篤志家から提供された和紙コレクションを標本紙として貼付、合綴したものである。これらの標本紙をみると、一種ごとに持つ素材、彩の美しさに言葉を失うほどである。また付録には、楮や三桮の実際の繊維まで付されている。

標本紙は非常に貴重なもので、門外不出とされていた印刷局の透き入れ美術紙20点も含まれる。ティンダルがこれらを手に入れたのは、日本人との協力関係、特に製紙業界からの支援があったからこそである。ティンダルの熱意にほだされ、時の三菱製紙常務取締役・関義城が所有する天平時代以降1200年間に作られた和紙225種、森沢日本和紙組合長所有の現代日本紙150種、

それに内閣抄紙局西大寺(岡山)分工所・長和田氏所有のスカシ入り和紙コレクションが次々に提供されたのだった。



写真はVOL.2 *The Seki Collection* の内容を一部示したものだ。天平時代の写経、鎌倉時代の紺紙の実物を標本紙として切り取って貼付している。このように手漉和紙の歴史を典型的な標本紙と解説文によって辿ることが可能となっている。

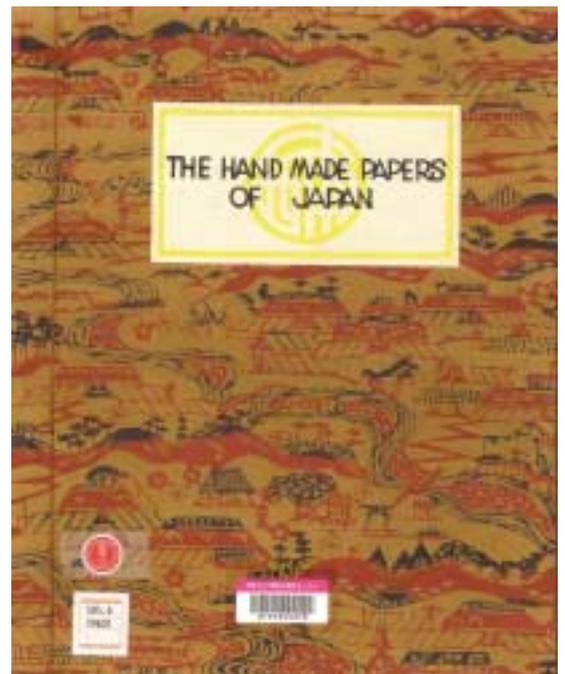
ティンダルと日本人協力者たちの友情

その伝記を^{ひもと}繙いてみると、ティンダルは目的にむかって真摯に邁進し、物事を最後までやり抜く性格を持った人であった。和紙研究に対する前向きな姿勢と探究心に共鳴した英文学者・和紙研究家の寿岳文章や先の和紙研究家・関義城らを動かし、厚い友情が育まれた結果この書物が誕生することになった。

また出版に尽力したタトル社のチャールズ・タトルは、日本とアジアに関する書籍を刊行して日米両国の相互理解を推進する出版活動を行った人物である。その功績により1983年には昭和天皇より勲三等瑞宝章の下賜を受けた。このようにみえてくると、日米の人々の稀有な出逢いと友誼がこの書物を生んだといえよう。

この友誼を示すため、著者の自序、アメリカ人和紙研究家ハンターの序文で始まるタイトルページには、「東」「西」のモノグラムが中央に配されている。国際協力によって完成したこの書物の精神を伝え、東洋と西洋の融

合を象徴するためにデザインされたものである。



タイトル中央の模様がモノグラム

本学の所蔵本

The Handmade Papers of Japan は1952年に250部限定版で刊行された(非売品)。ティンダルの母校であるスタンフォード大学など外国の有力大学、各国の元首クラスに寄贈されたという。

本学所蔵のものは、限定出版に先立ってつくられた見本版で、発行者のタトル自身が所有していたものである。なかには、彼が集めた和紙に関する新聞の切抜きや和紙に関する展覧会のカタログなどが添えられている。

限定版のため日本での所蔵館は少なく、また貴重な標本紙を含む性質上完全復刻は不可能とされ、多くの研究者にとって幻の名著であったが、幸運が重なり、数年前に本学でもこの書物を入手することができた。興味を持たれた方は一度手にとって、和紙の素材、彩の美しさを是非とも堪能していただきたい。